Nov. 1891
no. 291

女學雜誌

第二百九十一號　明治二十四年十一月十四日發兌

全國廢娼同盟會記事
父の誕辰　田邊花圃女史
附り、田邊太一氏昔がたり
密畫　ホッブス氏店頭に小公子を憶ひ想ふの圖
看病の樂
附り、二女生が奮て行を送る
社説　自修鍛錬の必要

下六番町六番地　女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 291. NOBEMBER 7TH. 1891.

EDITORIAL:—Self Discipline. How to Rescue the Afflicted.

MISCELLANEOUS:—A Call on the Philanthropists on the Subject of the Earthquake.

THOUGHTS AND FANCIES:—My Father's Birthday. What Experience Taught me.

CHILDREN'S COLUMN:—"Little Lord Fauntleroy." (A Translation.)

THE HOUSEHOLD:—The Pleasures of Nursing.

NOVEL:—Nagare no Ashi." (Only a Reed in the Stream.

CRITICAL NOTES.

CURRENT NEWS.

第二百九十一號目次

●挿畫　ホツプス、小公子を憶ひ想ふの圖一葉

●社説　自修鍛練○震災地善後策

●雜錄　震害の慘況、天下の仁人に訴ふ(雲峯子)○亡妻

●隨感　父の誕辰(花園女史)○余が獲たる所の者(忍)○

●兒籃　小公子

●家政　看病の樂

●批評

●小説　流の葦(第六回ノ下)是空子

●記事　全國廢娼同盟會記事

●時事　兩伯會合○憲法第六十七條○海軍熱○高等中學校○二の大學

●女報

(リツトル。ロード。フホントルロイ)

小公子

巖本善治妻譯

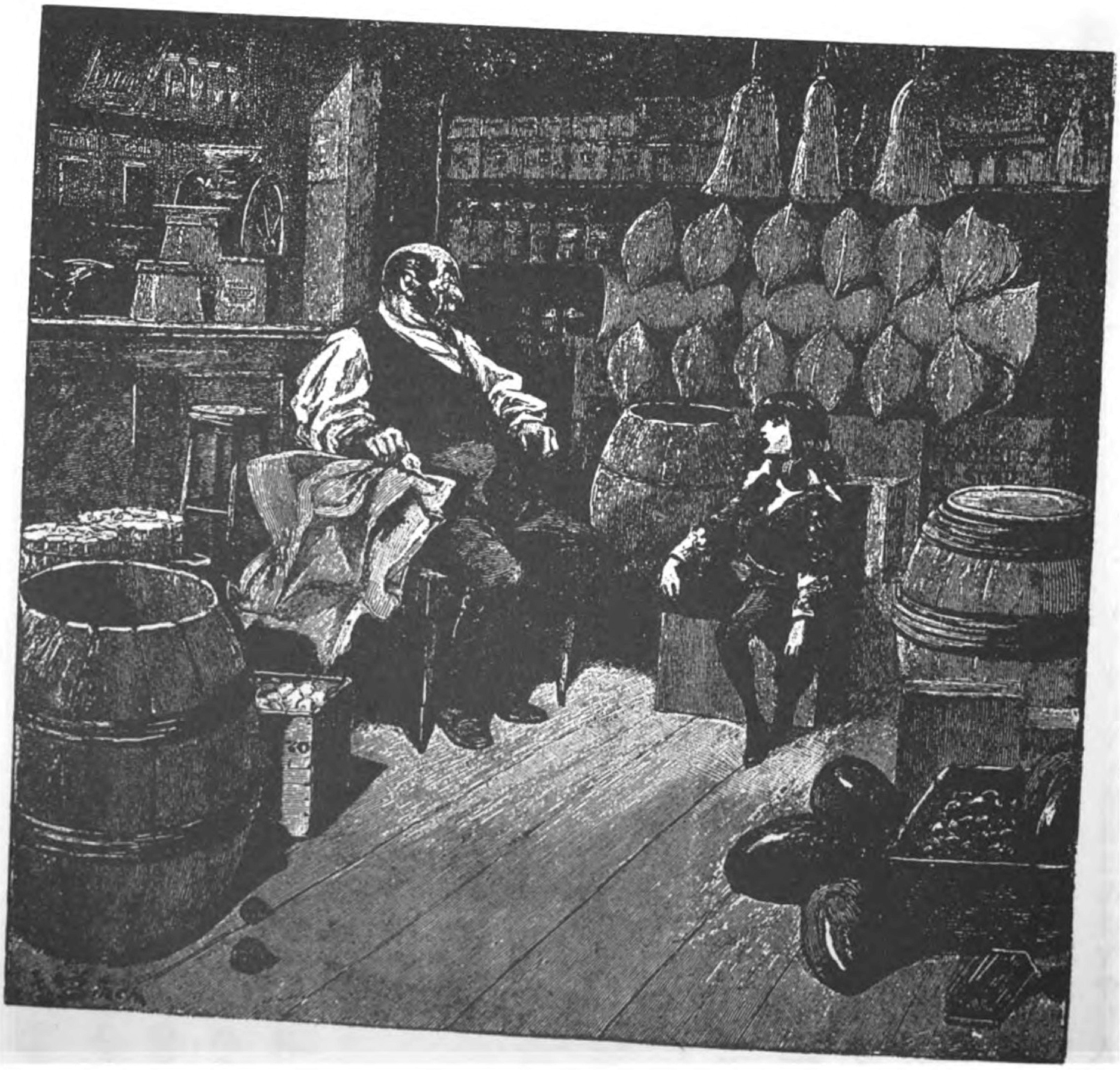
小供のよみ本

新版　去る十日發賣　少年文學書

譯者の序に曰く、母と共に野外に逍遙する幼兒が、幹のくねり、尋常ならぬ一本の立木に指ざして、おかあさん、あの木は小さい時誰かに踏れたのですネィ、と申たとか。考えて見ますと、美事に發育すべきものを遮ぎり、素直に生ひ立つ筈の者をくねらせる程、無情なとは實に稀で御坐り升。邪道に陥らふとする父の足をとゞめ、卑屈に流れ行く母の心に高潔の德を恩ひ起させるは、神聖なる天職を擔ふ可愛の幼兒に限ります。私は深く幼子を愛し其恩を思ふ者故此珍重すべきまろうどを尙一層優待したいと切に願ふ者です」と。斯る主意にて譯成る。原著は近頃英米に響き渡り、子供の讀物として愛々しきと潔き事の類ひ無きは更にも言ず、白髪の老者も心頑なの人も、之を讀る間は天使に接する如しとて、推賞大方ならず、改版十數回、且尙ほ劇に演して非常の喝采を博しぬ。譯者は斯る原文の味を損せじとて辛苦せられ、紙數二百八十頁、密畫十四箇入の大本として今日世に進め玉へり。一册正價三十八錢。郵税八錢也

發兌元　東京市下六番町六番地　女學雜誌社

ホッブス氏小公子を憶ひ想ふ



Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第二百九十一號 明治二十四年十一月十四日發兌

社説

自修鍛練

當今の通弊は、人に自修鍛練の養なひ無きに在り。鬱勃として精神内に滿ち、技量施こすに所ろなく、慨然胸を撫でゝ國家の長計大策に任ずるが如きは、極めて少なし。羽を擴げて世上に飛渡る雲霞の如き才子原を看れば、彼等は家を出でゝ而して后ち默考し、走り出して而してのち思案す。浮足飄々として輕きと塵の如し。何をもて國家の大事を托するに堪へんや。

夫の草を見よ、彼は先づ芽ざし、根づき、葉を生じ、幹を伸し、あらん限りの準備を畢えて而しのち初めて花を開く。傍はらに馥郁たる香を發つものありと雖ども、彼は未だ時ならずして先づ其花を開かんとするものにあらず。然るに人や、未だ大ひに蓄はふる所ろあらず、いたづらの機會を僥倖にして功を万一に收めんとす。彼の蘿葍を見よ、蘿葍の大ひなる根は其未來の爲めに準備したる寶藏にあらずや、人は之を食つて而して自ら準備するとを知らず。あゝ菜根を嚙む所ろの人反つて菜根に及ばずとは、何等悲しきの事ぞ。

腹中經綸を收めず、胸頭長策を抱くとなく、たゞ卒然として輕く成就せしめたるの事業は、人間の事業にあらず、偶然の出來事なり。喩へば、風の吹渡りてもみ壳を集め、河の流れて洲を造りたるが如し。事業ありと云へども、天下に誇るに足らざる也。

猿猴にして冠するは尤とも笑ふに堪ゆ。然れども其器なくして僥倖の事業を管するものは、更に憫笑すべし。其事業の發達せざるは言ふとを待たず、其の將に倒れんとするの心細きは、風前の殘燈、今や一吹して滅せんとするが如し。

二宮先生、其報德記に云へらく、誰か麥よりして米を得んとするものぞ、麥の種は麥を生ずるの外なし。誰か至誠にあらずして而して至誠の事業を成んとするものぞ、偽はれる人は即はち偽はりの結果を受るの外なし。然れども何ものぞ一粒の米五六十の粒を生ぜずと云ふ、試みに之を播散せよ、一と年にして直ちに五十倍六十倍せん、左らば何人か、一人の至

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

誠逆に百人を動かすとを得ざると云ふと。（大戴摘要）

不幸にして今の人此邊の愼戒を覺らず、己れ未だ敎えずして早く人を敎えんとし、己れ未だ感ぜずして早く人を動かさんとす。暫らく戸を出で丶歩を重ぬれば、四方の光景歷々として皆な此象にあらざるはなし。

傳道師は傳道すらく、汝等もし悔ひ改めずんば救はる可らずと。然れども其人果して悔ひたりや、其人果して救を得たりや。彼は自己の道念の發揮せざるを何如斗り酷痛し、天の救の忝げなきとを何如斗り感謝したりや。其涙の熱何如に、其悔の血幾斗量なりや。

去つて、演說會場に入る。辯士の聲は風の如し、慷慨の響は地を打つに均し。其聲心より發せず、口より發す。彼未だ自から泣かず、何人か泣かん。彼が苦辛準備したる所ろのものは、其辭ばなり、其樣態なり、其抑揚結搆なり、故に吾人は之を賞贊せんとす。たゞ其の人を泣かせ人を震動せしむるの至誠に至つては、吾人毫末も之に觸感せず。

暫らく事業家の店に入る。彼が巧辯は流るゝが如し、彼が腰は折れるに似たり、其才敏ならざるにあらず、其利多からざるにあらず。吾人は黃金を得るの術に於て彼を賞贊せんとす。然れども、彼は幾何の確信と至誠とを以て其事業を執れりや。彼は國家の爲に之に從事せりや。果た私利の爲にするか。彼は其生命を獻げて事其業に從へりや如何ん。吾人は斯る事業家を見ると極めて稀れなり。

學校を見よ。維新以來校舍の大ひなるものは出來たり、眞の敎育者は跡を絕たんとす。近來何んぞ學校騷動の囂々たるや。師弟の間信愛の行はるゝと稀なり。臨むもの官吏然たり、受くるもの奴隷然たり、あゝ何處にか「敎育」と云へるもの行はるゝ乎。而して其根元は、敎師が自から省りみ、自から養ふの氣風なきに源ひす。

多少の人に會して之と談ずれば、貌を飾るもの、聲を美はしくするもの、心を隱すもの、才を顯はさんとするものはあり。一種の神韻、風采の間に彷彿として、道德上の空氣よく人を包み、神靈上の光線よく人を射るが如きもの極めて稀れなり。舌頭を以て談じ、衣服を以て交る。たゞ外貌、地位、位階の上に於て上下するを以て最后の優劣となす。人に心服して其德に從がはんとするものなく、自からに耻ちて大に愼しむ所

ろのものもあるなし。未だ恥ぢず、故に悔ひず、未だ悔ひず、故に改めず、未だ改めず、故に進まず、滔々たる世上の交際は野獸の力押しに似たり。

歸來して密室に入り、危坐粛然として、大ひに自警すらく、吾人もし眞ことに此の形勢に慷慨することを得ば、其慷慨は人に聞かれざることなけん。吾人もし世の淺薄なるに憂ひば、自ら奮ふ所ろ亦た能く人を重厚にすることを得ん。吾人が憂ひ未だ足らざる也。左れど、吾人が心未だ眞ことに慷慨すること能はざる也。人の自修鍛練足らざるに非ず、吾黨自から爲す所ろ尙ほ足らざるなりと。

あゝ自修鍛練せざる人は、附燒刄の如し、鸚鵡の如し、暗誦の如し、赤兒の如し、以て大事を托するに足らず。天地の粹を集め、四方の美を吸ひ、千古の俊傑に學び、當世の急務に應じ、六合の元素妙に結合して、見よ、此に偉人成れりと叫ぶことを得るは、自修鍛練の成果なり。轉々として移る宇宙が大進歩の歩みの上に、「我」と云へる一個の存在者確立し、磨す可らず拭ふ可らざるの美蹟を千古の世表に植う。上帝、「我」をして斯あらしめんとて造り玉り。「我」の存することを豈に偶然ならんや。

警告す四方の同志諸君、希はくは自修鍛練せよ。地軸廻轉し、明治の繪卷物漸く卷き、蓋し遠からず、將に一大時機迫り來らんとす。此時に當り、諸君は能く國家の用に應ずるに堪ゆる乎。

維新の元氣明治三四年を以て消えたり。然れども、天、尙ほ國民を警動せんとし、內閣を二つに割り、上下に騷動の種を播き、前后三回の內亂を發し、再度外國に葛藤を生ぜしめ、幾度か、天災地變を降して大ひに我同胞を警醒せんとす。而して同胞尙ほ昏睡す。

思ふに、大日本帝國の國歩は、此平々凡々の道ゆきにてはある可らず。必らずや遠からず、一大時機に到達せん。此時や長袖の人は袖を斷ちて逃げ、白馬の主は鞍を置かずして走り、小官人は絕倒し、舞蹈の足は驅るにも尙ほ遲きの時なり。而して此時や、山下の農夫鋤を擲うつて立ち、破窓の書生劍を拔いて出で、貧窮せる私學校の師弟合して一國の義勇軍となるの時なり。あゝ其時の來るや日に日々切迫す。

十九世紀の戰とは、必らずしも、干戈兵陣の事にあらざる也。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

或は貿易の形を以て、或は條約改正の形を以て、或は內地雜居の形を以て、或は外資輸入の形を以て、或は、敎師書籍の形を以て起る。

國家前途の長計を案じて、自ら足らざることを感ずること切なり。吾黨先づ自修鍛錬せずんばある可らず。金を燒きて冷水に入れ、亦燒て冷水に入るゝが如く、糸を曝して亦洗ひ、洗ひて亦曝らすが如く、吾黨は鍛へざる可らず、練らざる可らず、困苦せざる可らず、勤行せざる可らず。

震災地善後の策

誰か不幸の人に涙を灑がざらん、個々相應の力を盡し、之に寄捨義捐せんとするは人情當に然るべきことなり。四方の人、先を爭ひて慈善救濟の道を講ぜらるゝは、素より賀すべきことに相違なし。

然れども、只だ錢を與へ、衣物を與へ、肉體の看病婦を與ふることのみに局促として、更に一層切要の救濟法に心を注がざるは、未だ遺憾なしとせず。

社員の報道に云く、震災地の人民は最早義捐金を當にし、既に痛恨を忘れて早くも安樂の策を胸算するものあり。一體の景色、大災后の人氣に似ずと。之れ尤とも戒心すべきの報道にあらずや。

天災地變は、邦家大革命の機を宣言するものなり。之に罹りて僅かに生命を殘したるものは、當に興奮して其殘生を一新せざる可らず。此に於てか、災は反つて福の種となり、被害の地暫らくにして舊都に優るの繁昌を來さんとす。

然るに、今や家を倒し、同族を殺し、僅かに露の命を雨漏る茅屋に繫ぎ止めたるの輩にして、既に人の慈善に安んじ、少額の金に安逸せんとす。斯の如くば、彼等が靈魂は一層墜落したり。彼等が精神は一層腐敗したり。其人、其地、最早永久に救はるべきの望あらず。

災變后の民心は常に一新すべきの機に接す。禍を轉じて人世の大幸を齎らし來るは實に此時にあり。之を此れ察せず、只だ慈善と云へる浮たる名に迷ひて、一時の流行に連れ、此にも亦一種の名譽心に追はれて、只だ救濟の人后に立たざらんとする者多きは、何事ぞや。震災地善后の策は、嚴そかなる思慮、敬虔なる祈禱の心より發し來らずんばある可らず。

雜録

震地の惨状、天下の仁士に告ぐ

雲峯生。

孤客雲水に伴ふて飄然遠遊す、計らざりき、偶尾州の某地に宿する時、震災を見んとは。震後日々罹災の地を巡視し、之より亦遠く去らんとするに當り、一書感を記して送る。

十一月八日。

夜來天を蔽へる暗雲未だ消せず、今曉地を拂ひし微風全く死し、四境八荒寂として靜まりはてぬ、時に井上水くむ車の音ひゞき、雞鳴細く聞ゆるのみ、所々の軒簷、青烟低く迷ふは朝の炊事にか、路傍の屋内に蕭々たるは掃除の時なるべし、下婢は朝餐の用意に孜々たり、丁稚は店頭の物品陳列に匆々たり、幼兒は未だ床にあつて遊戯の夢を結び、子女は既に起き出て、登校の用意す、尾濃幾十万の人、起き、動き、坐し立こと、平日と異るなし、乾坤轉じ、時間移り、時針將に指さんとす、午前第六時三十八分五十秒。

轟然一聲、大地鳴動、家仆れ、物落ち、塔崩れ、石轉ず、須臾に人聲騷然、泣くあり、呼ぶあり、絶叫するあれば、喫驚するあり、皆茫然として爲す所を知らず。

騷然亦囂然たる裏、忽ち耳底を掠るの警鐘、即ち失火を報ずるの響なり、倒家の屋上に立つて涙を流して救濟を乞あり、愛兒の壓せられしを悲しむの母あり、三兒相集つて泣く、即ち父母の死骸を擁するあり、老母周章行く所を知らず、其故を問へば孫子皆屋下に仆ると云ふ、或は妻子を失へる夫あり子に別れし親あり、父母におくれたる子女あり、一家悉く死せるあり、其狀もとより筆紙の盡すべき所にあらず。

時移り、激震收るに至れば、災を免れ、負傷せざる者は即ち死者を探し、負傷者を舁くに匆忙たり、頭を碎きて死せるあり、柱下に壓殺せられしあり、手を折り、足を破りしが如きに至つては殆んど枚擧に遑あらず、然れども思はざりき、兩州に於ける死傷者合計萬餘に至らんとは。

靜肅寂然たる中秋の曉色、忽然變じて悲愴凄涼見るに堪へざる慘狀となりぬ、陰雲漠々天に充ちて日光爲めに影を失し、愁聲哀怨地に滿ちて禽獸爲めに聲を奪はる、逝水混々萬代に流る、昨日より今日に至り、今日より更に明日に至る、然り

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

焉んぞ知らんや、今朝無心の人、今は即ち慘憺なる悲境に陷るべしとは。

實に是明治廿四年十月廿八日早朝。

實に是尾濃兩州に於ける大地震動の時、余の目擊せる所、「天災地異もとより少しとせず、然れども其最も災害を及ぼすの廣、激、且つ大なるもの、よく震災に如くものあるか、尾濃兩土の民族果して殊に罪あるか、曰く否、然り否あるが故に慘狀悲景の默視するに忍び難きある豈止を得んや。

震後の狀態、誰か視て潸然たらざる、

震動の中心を尾州西部及び濃州西南の郡土となす。余一日其狀實視の爲め金城を去て西向す、步一步、間一間、其災害の度烈しきを加ふ、金城市内に於て破仆せるもの多くは舊屋古家、柱朽ち、壁傾きたるものとす、故に人口全數に比すれば死傷者甚だ少し、市を出で西に趣くの道、路傍の家屋殆んど全きものなし、行くこと凡そ半里許、河流あり、之に架するの板橋、支柱折れて其中央水に委し、兩岸の堤防崩壞して高低を生じ、破口を爲す、而して鐵道に至れば石崩れて道を埋め、地低く落ちて鐵路中空に懸る、以て其震動の激烈なりしを知るべし。

之より西して淸洲、一之宮地方に至れば更に甚しく、殆んど戶每に死傷者なきはなし、家仆れて更に火災に遇ひ、餘す所は唯一、身あるのみ。地烈けて泥水地上に汎濫し、井水濁りて飮むべからず、僅かに高處を求めて假屋を築くと雖も、今尙震動止まず、時あつて地心鳴動す、再び激動なきを保すべけんや、晝は家を取壞ちつゝ災時に死せる愛人を思ふて坐ろに淚に咽び、夜は假屋風雨を洩して愁夢結び難し、此種の人もとより無慮幾千万。

某地に一知己あり、即ち訪ふて災時一家恙なかりしやと問ふ。彼悄然答ふらく長子彼の柱下に死し、荊妻幼兒を抱て此處に死にきと。默して亦云はず。余亦言の出るなし。潸然默禮して去る、行々顧望するも嗚呼腸將に斷んとせり。

亦某地に知れる家あり、即ち訪ふ、家屋已に黑烟と化し、石礎僅かに殘れるのみ、徘徊すれば傍らに假屋あり、席を上げて内を窺へば妻君兒を抱て坐す、夫は不幸にして逝きぬ、一子、手を傷む、幼兒恙なし、妾は斯く足部を痛めぬ、財亡び、家燒け、今や世に在るも詮なし、怨むらくは夫と共に死せざ

りしことをと。語終つて低首。面を幼兒の顏に接して聲を放つて泣く。人情あるもの見て以てよく忍ぶとなすか。余即ち之を慰め、徐ろに善後の策を講じ、二兒を撫育すべきを告げて立去りぬ。

某地に一富豪あり、所有の借家悉く破滅し、妻子皆死せり、爾來茫然自失、狂せるが如く痴なるが如し、人彼を見て狂せりといふ、彼曰く狂せざらんと欲するも得べけんや、震災は全くありしにや、妻子果して死せるか、往事夢の如く、殆んど辨じ難し、眞に然るなり、然るに人我を狂せりといふ、我甘じて狂者と呼ばれんのみと。顏色蒼衰、食するなく、寢るなしと。思ふに此境に處して狂せざるものは癲者にあらずんば即ち白痴の人か。

震火兩災に罹りし某地より來れる人あり、余に語りけらく、全市悉く倒破し、一方より火起りぬ、時に余は某知友の家にあり、辛くして災害を免れぬ。然れども知友は其家族と共に家の下にあり、余は力を盡して之を救はんとて瓦を取り放ち梁を切り、柱を除き、友人の所在を求め居たり、時に側より救を呼ぶの聲す、頭を擧げて見れば仆家の隙より僅かに顏を出して絕叫するの老母あり、余は救はんと欲すれども知友と兩者を救ふ能はず、間もなく火勢延て彼の老母の家にも至りぬ、苦痛の聲を放つの時人あり、辛くして之を救へり、若夫れ人なくば燒死せしのみ、思ふに不幸にも生きながらにして火中に葬られしもの甚だ多からんと、何ぞ夫れ無殘なるの甚しきや。

余亦某地を過ぐ、稚子仆屋の傍にあり、面を被ふて泣く、近づきて其故を問へば父母及び幼き弟姉皆死しぬ、使に出て家にあらざりしを以て辛くして免れぬ、今や行くべき所なし、我如何にすべきかを知らずと、僅かに東西を辨じ、人事を知るに至るの稚子、此より孤獨の身となる、何處の風波に漂ひ何地の岸頭に身を寄すらんア、。

斯種の慘話もとより無數、殆んど盡し難し、死者誠に憐むべし、されど親戚妻子を失ふて生存する人は更に憐むべし、天下の仁士、實際の慘狀は余が記する所に、千倍するを思へ。

救濟の必要、仁者夫れ吝なる勿れ。

昔年嘗て貧民窮乏に泣きし時、火山墳出せし時、洪水汎濫せし時、大船沈沒せし時、不運の人を憐察し罹災の民を救恤

せし、天下の博愛仁慈なる志士よ。世上若救濟すべきものありとせば尾濃の罹災者は即ち其最なるものならずや。家を失ひ、財を失ひ、兼て父母妻子離散の不幸に遇ひしものは即ち可憐なるの甚しきに非ずや。若夫れ施與の多寡は余の知る所にあらず、財に應じ、力の許す限りは乞ふ今回の罹災者の爲にも亦吝む勿れ、兩土幾万の人士の爲に大に訴ふる事然り。算盤を取て利害を數へ、沈思して損益を說くは是平時の事なり、一朝地變我同胞者に加ふるに非常の災害を以てす、是平時と云ふべからず、然り平時に非ず、非常の時なり、此時に於て利害損益を考へ、災害を近く感ぜざるが如く、冷々看過するは是仁者の爲すべき所ならず。

數千の魂魄、荒涼たる殘礎破屋にあり、數万の生靈窮乏に苦しみ、愁涙を死者の墓前にそゝぐ、幾千万の家屋或は仆れ或は破れ、或は燒失して殆んど再び用ゆべからず、思ひ來れば悲哀極つて更に記する所を知らず。

余は尚廣く各地を見聞し、若夫れ尚記する所あらば重ねて通報すべし、今日偶 宿舍に在て閑を得たり、即はち記して送る。

亡き妻

紫蕣山人

人誰か己を愛せざらむ。人誰か己の如く其半身なる妻を愛せざるものあらむ。ラマルチン妻を失ひたる時、痛く嘆じて心の底を打ち明しぬ、

妻を失へる人は家を覆ひたる老槲樹を切り倒されたるが如し爾來世の憂き事と艱難とは直に獨者の心の上に落ち掛り最早之を慰め救ふものなし右手の枯へたるか如く天使の其翼をもがれたるが如し動けば則地に落下するの心地す眼潤り涙ぐみ死の來んとする時常にありし慰め手を慕ひ思ふ。

豈其れ彼のみならんや理屈一偏に世の海を渡りしミル翁も其妻を失ひては中々に殆ど其生命を掠られたるが如く墓に哭しことも實に理にこそ。至重の寶も我が手に在るうちは左程に感ぜず粗末に扱ふことさへなきにあらず之を失ひて後に其眞の價を悟る例し鮮きにあらず。况して生前相思相愛の間に於てをや、或人、

うつし世にわれといましとむかひ居て
住みし時さへ戀ひしかりしぞ。

さびしさをなぐさめかねて野にくれは

お花が末に秋かぜそふく。
ぬひはてぬころもの袖はわがなみだ
ぬぐはんためのかたみありけり。
吾妹子が毛いとえらみてあみかけし
わが手袋は猶のこりつゝ。

あゝ良人たるものよ爾の半身を愛遇歎待せよ後に悔ゆる血の涙も決して去りにし人の心を暖むるものにあらざる也。
良き妻は良人のかざり也。

家政

看病の樂

余が敎え兒のうち、此度震災に罹りし地方より來り居るもの三人ありき。一人は義ある母壓死し玉へりとの飛電に接し即刻出で立ちぬ。二人の家は恙がなきよしの知らせありつれど、其村の中に數多の死せし人、傷つきし人あるとを聞き、速やかに出で行かんと請ふと切りなりき。

其一人は、父にて坐はす方年久しく病み玉ひ、之が看護を爲せしより此方初めて看病と云ふとの最とも樂しきとを知れりと云ひける敎え兒なり。又の一人は、志雄々しく寧しろ勇み進む方に失せんかと案ぜらるゝ質なるが、前なる一人と共に涙を奮つて訴ふらく、たとひ妾等が家と妾等が親戚とは恙がなかりしとは云へ、同國の同胞かゝる痛ましき淵に沈める折、如何で安らけく文讀むとに日を消すべき、ナイチンゲール、ドーラが事は平日高話にて承はりぬ、聊さか其御敎を實行するは、今日の事なりと言ひ、決心凛乎として動かす可らず、辛くも一日二日猶豫させて、遂に送り遣りける。

天長節の夜、鹿鳴館にて舞踏の宴正に酣なはに、日比谷の原に花火徒らに打上らるゝ邊り、敎え子等が古衣襤褸を集めて二つの大包と爲せしを載せ、彼の二人を送りて新橋停車場に趣むく。

東海道氣車發行の時限を期し、あわたゞしく四方より集まり來れる人々は、皆な容易ならざる顏色にてあり、余密かに語りけらく、彼人々は皆一個々々に悲痛慘澹たる歷史を有するなるべしと。九時五十分、滊笛一聲、車發す。時に余はシスター、ドーラが傳を二人に餞したり。

今日警醒社主人、ドーラ女史が傳を送り寄せて其批評を請はる。一讀して、端なく、前夜の事を憶ひ起しぬ。
人は言はん、ドーラが日夜刻骨の看護は、何如に心苦しきとなりけんと。左れど彼女は之に増すの樂みあるとを知らざりしなり。千八百七十五年三月一日、ウォルソールの傳染病院より彼女が送りしと云ふ文の中に、

……此處は戸を開けば霎時の間も痘瘡の臭氣にて堪へ難しされば我如き價値なきものをも神は許して御用に立させ玉ふと欣喜に堪へずあゝ余は神の爲には生命を抛うつに足るべきものと神の御思召あらば喜んで此特恩を拜謝すべし我は感謝の情を以て溢れんとす我が働らく時余は「汝即はち我になせり」との靜なる小さき聲を聽くに似たり……御身にして余が孩兒を洗ひ居る處を見玉はゞ笑を發し玉ふならん憫れむべき哉彼等は痘瘡にて息を塞がんず斗りなり、彼等は中々余を慕ふやうになれり左り乍ら小兒あるが故に洗濯物甚はだ多く我等は夜中の看病を爲す外に之をも悉皆爲さゞる可らず御身推察し玉はれかし余は馬鈴薯を煮る間の寸暇にて此ふみを認ためたるなり……若し傳染の恐なくば實に御身が寸時來つて余を見玉はんとを望めり余は誠に愉快にて幸福なれば……

余は、此の看病婦美談を人の多く讀まんとを希ふ。

兒籃

小公子

第十二回（乙）

若松しづ子

兩人が話し合つて見れば見るほど、話しが盡ない樣で、迚も一度には六ケ敷處から、イツソ明日の晩、ヂックがホ氏の店へ出掛けるといふとになり升た。ヂックは大悅びでした。此兒生れ落ると直から、あちらこちらと流浪して歩るき升ても、惡るいとはしたとがなく、モ少し上等な生活がして見度と心の中に始終願つて居升た。自分が獨立の職業に就てから、野宿丈は止めて屋根の下に雨露を凌ぐ丈になり升たが、モ一層生活の度を進め度と思ひ始めて居た處でした。それ故、角店の主人で、其上に馬と荷車を置た一廉の商人に招待さるといへば容易ならぬ名譽の樣に思ひ升た。ホ氏が此時、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

おめへは、侯爵だの、城だのといふと何か知てるか？、おれはモット委しいとが知りたいと思ふんだ。

ナニ「一錢小說」ッていふ新聞に、そんな話しが出て來て、わしらの仲間で買つて讀んでる人があり升ぜ、中々おもしろいでさア。

フン、さうか、おめへ來る時、持つて來チイ、おれが代を拂ふから、侯爵のとが書いてあるんなら、どれでもみんな持つて來るが好ぜ。侯爵のが無けりやア、伯でも、子でも好や。ダガ、あれは伯だの子だのッていつたとはねへ樣だつけよ。いつかふたりで冠の話をしたつけが、おひ惡く、又おれが一度も見たとがねへもんだから。こけいらにやア丸でねいもんの樣だナ。

大店なんかにアありさうなものんですがチ、ダガ、わたしらア、見たつて知れねいだらうと思ふチ。

ホー氏は自身にもどふも見てそれと見分がつくまいとは明言しませんかつたが、たゞ樣子有げに又も頭を振り升た。

たんと、人が買ねいんだらう、

といつて、其話しはそれ切りになり升た。

これが緣となつて、此二人は續懇の朋友となり升た。チックが彼の店へ來升時は、ホー氏はいつも、歡んで迎へ升て、林檎樽のある邊の戶の傍に寄せかけてある椅子へ、招じ、チックが腰をかけた時分に、煙管を持た手で仲の林檎へ指しをして

おめへ、勝手に食ふが好いよ。

と愛想し升た。それから例の小說新聞を讀み、あとは英國の華族の話しをするのに、ホー氏は頻りに煙草を吹かし、頭を振り升た。格別、深い因緣の環を足に持つた高い椅子を指す時などには、最もひどく振り升た。そこで、言葉に力瘤を入れて

ソレ、あそこにあるのが、あれの蹴た跡だワ、まがひもねいあれの靴の跡なんだ。わしはポンヤリいつまでも詠て居るとがあるんだ。なる程、世の中の浮沈といふが、そこへ坐つて、箱の中から菓子パンを出て食ひ、又樽の中から林檎を出して食て、心を外へ投た者が、今となれば、華族で、お城住ひだなんてナ、シテミルト、あれも華族樣の足の跡だぜ。追つては侯爵さまの蹴跡になるんだ。色〳〵獨り考へてナ、「たまげはつたこつたつて」言つてるのよ。

この通り繰り返し〳〵昔しを語つゞげて居て、チックが尋ね

て來るのが何よりの慰らしいのでした。チックを宿へ歸す前に、後ろの少さな室で共に食事をするに付て、店から菓子パンや鑵詰物を運び升て、チックにも馳走をし升た。終りにホ氏は生姜の沸騰水を二瓶持つて來て、恭しくこれを開らき、コップ二ッへあけ升て、

サア、これであれを祝はふ。それでどうかしてあれが行つた爲に、侯だの伯だのといふ奴たちをすつかり、改良すれば好いナア。

其夜は先づそれ切で袂を分ち升たが其後も、兩人はしば〳〵出逢ひ升て、ホ氏も淋しさを減じて、慰めを得ました。二人して一錢小說や、外に面白い物を讀み、貴人、華族たちの風俗を知る樣になり升た。併し其風俗といふものは、この通り輕蔑された人々が若し聞知れば驚ろく程法外な話しでした。ある日ホ氏は品物を買うとて、わざ〳〵下町の本屋へと出かけ升た。さて帳場へ坐つて居る番頭に向ひ、

もし侯爵のとの書いてある本が欲しいんだ、

といふと番頭が不審さうに

なんです？

ナニ、侯爵のとが書いてある本が欲しいんだ。

番頭は妙な顏をして、

お氣のどくさまですが、さういふ物はおあい悪くです。

スルト、ホ氏が、心配さうに、

さうか、そんなら伯でも、子でも好いワ。

どうも、さういふ本は存じませんナ、

ホ氏はこゝに至つて、餘程心痛いたし升た。先下を見、又上を見て、

それじや、女の侯爵のこつても好いが。それもないのか？

番頭は可笑さをこらへて、

どふもおあいにくですナ。

おいらアたまげつちまつた。

と此時ホ氏が言つて、ドシ〳〵店を出ようとした時、番頭が一寸と呼びとめて、華族が重立つた人物になつてる小說で間に合ふかと尋ねました。ホ氏は推つ通し侯爵のとが書いてあるのが無いとならば、それでも間に合せるといひ升たに付て、エーンスウオスといふ人の書いた「ロンドン府の物見」といふ小說を一冊賣り升て、ホ氏は先づこれを持ち歸り升た。

そこで、チックが來升た時、それを讀始め升た。これは盜ら

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

しく極く面白い本で、血塗れメレと仇名された英國の女王の名高き治世中の話しでした。そして、ホ氏がメレ王が頭を割ほど無雜作に人の首を刎ね、或は人を強問に掛け、又は生き乍ら燒いたとなどの所業を聞ては、非常に心配し始め升た。先づ絶へず口にあつた煙管を出してチックの顏を呆氣にとられて見詰めて居り升た。それから顏から流れる汗を拭ふとて赤いハンケチをポッケットから出し升た。

それじや、あれも危ねへじやねいか。劔呑〳〵、女なんどが位に坐つても、そんな指圖をするんじや、今どんなとになつてるか知れやしないぜ。大丈夫どこじやねへワ。そこに書いてある女の樣なのが怒り出した日にやア、誰れだつて、危なくねへ者はねいゾ。

チックも多少心配らしい顏をしながら、

ダガナ、今切り廻をしてるナア、この女じやあいんですぜ。ホレ、今のはヴィクトレとかいふんで、此本にある奴ア、メレちい升たらうが。

ホ氏はまた額を頻りに擦りながら、

さうだつけナ、さう〳〵。強問だの、燒殺だのつていふとは新聞にもねい樣だナ………それでも、そんな、へんてこれんな奴らと一所になつてれば、なんだか、あれも劔呑の樣だナ。ナント聞ねい、七月四日祭せい守らねい樣な奴らださうだぜ。

此後ち、數日間、ホ氏は心中誠に安からぬ思をして居り升た。そして、フオントルロイから來た手紙を幾度か自分にも讀み、又チックにも讀み聞かせ、同時にチックに來たのを讀むまでは、容易に心が落着ませんかつた。

試みに斷食せし人

基督四十日間荒野にて斷食せりとの記事を確かめんとて、試みに斷食勵行するもの西洋に尠なからず。近頃、英國にてジヤツクースと云へる人賞金を懸けて五十日間の斷食を試み、恙なく之を爲し遂げたり。斷食中は、水と煙草とのみを少しづゝ、喫したり。水は一日一クヲート（三合餘）余を飲み、外に五十日間にて或る粉藥百五十四ピンチを服したりと云ふ。五十日目には、十一ポンドの重量を荷ひたり、斷食の初よりは、二十八ポンド四オンス丈け目方減りたれど、丈は一寸伸びたるよし。

隨感

余が獲たる所の物

しのぶ

世に出でゝより十年、日夜勞役して盖し怠たる所ろなかりき。而して今ま獲たる所ろのものは、何ものぞ。至誠未だ足らざるが故に、誤解せらるゝ所ろ多く、經驗未だ至らざるが故に失敗する所ろ多く、理財未だ精しからざるが故に損する所ろ多し。若し世俗の階級に照さば余が段席は寸地も登れるとなし、若し來往の交友に數へば余が知人は一年一人を得るに過ぎず。妻あり子ありと雖ども衣食に於て之を安んずるとなし、書生多しと雖ども一々要路を與ふるとを得ず、文書を知ると大ひに増せりと雖ども未だ讀まざるもの多く、腹案やゝ熟せりと云へども未だ書かざるもの多し。余が獲たる所ろのものは何ものぞ。

盖し余は何ものを獲たるかを知らず、然れども「感謝」の念日に日に増し、或時は潮の湧が如く、或時は玉泉の迸ばしるが如きを感ずると夜々に切なり、之によりて余は日夜に獲る所ろのもの加はるとを覺る。涙を落せしと幾度ぞ、而して其終りは感謝なりき、斷腸の機幾回なりしぞ、而して其末は賛美なりき。實に余は愚かなりき、今日に於て斯く斗り前日の余が愚なるとを知りたらんには、后日の余は抑も如何に進歩すべきか。望み察して莞爾、樂しみに肉の躍るとを覺ゆ。余に積める黄金あらず、然れども日に日に感謝を積むが故に何ものか余に大ひに與へられつゝあるとを信ず。蒼天を仰ぎ、清流に望み、樹陰に伏し、靜かに省慮すれば、人世は如何に樂しき塲ぞ、余は如何に多望の人ぞ。感謝の辭ば悉すに由なし。

誕辰

花園女史

我父の誕生日は十月廿日なり。家の中の者共うちつどひ、少やかなる席ひらき、母の手して調させ玉ひしもの、我不束に料理せしものなど食べ終りし時、父我にむかひ給ひて、酒にひたされ肉に耽るとは事かはりて、今日の圓居はたのしき限りなり、今父が過こし六十近くの年月をおもへば、喜ばしきかなしき種々なり、今日の傳手に一ッ二ッ物語りて、祖母君の凡ならぬをもかたり聞えんとて席を正し玉ひぬ。

父にておはせし人は尾張國の產れにて姓は村瀬氏なり、醫

の業をいとひ給ひてか、江戸にきたられて、母君の婿となり給ひぬ、學博く識高ければ、彼山陽などとは淺からず交り給ひて日本外史の稿ならんとする時は、かれより問おこせし事あまたあり、左氏傳其他其頃板刻なりしものは、力を盡しまた著述のとも多かりき、母亦其婦にして、はぢざる御行狀あり、夜はほのぐらき行燈に、縫物しつゝ四書五經を予(父也)に口授し給ひ、晝は數多の門人等に、父の助けして、心を配り給ふ、實に今の世にあるまじく行狀正しく、慈愛深く、數多の人になさけあつければ、門人等は殊に馴れまつりき、予兄君に伴なはれ京都に行て、かへりし時、中山道を經て、鵜沼といふ建場にて俄雨をさけしに、眼光するどく麻痕みゆる士、しといぬれて走りきたりぬ、あなおびたゝしき雨なりと予が側に腰打かけて、俄雨の習ひなれば、とみに晴ぬべきなれど、君はいづれへ行かるゝにやと、とふに、予、京都より江戸へ歸るものなりとこたへぬ、何江戸の人とや、吾も又、江戸へ行ものあり、江戸は文人學者數多かるを、いづれにつきて、學び給ふやととはる、否師は我父ありといへば、彼人おしかへして父君は誰人にや、苦からずはもらし給へといふ、申し聞ゆべき者にも候はず、村瀬誨輔と申者なりとこたゆるに彼人おどろき立よりて、村瀬先生の令息成しよ、しらねばとて禮を失し候ひぬ、吾は吉田寅次郎なりと名のりぬ、名のり合て後は心とけてともに物語りぬ、予は十八の年にして彼は廿四五程に見うけぬ、吉田氏彼方を指して太田川の邊りに建る碑を見給ひしや、秦鼎は君(父を指す)の父君の師にて今、名高き人なり、世の人こそしかたふとめ、寅次郎が眼には、此地の雲助にも及ばぬものとしりぬ、かの碑の終りに、此地の佳景を稱して、

何處無山秀何地無水流借問東西客有此山水不

借問立碑者曾識東西不

あまり見識の狹きが、をかしさに、かく斧鉞を與へたりいかに思ひ給ふ、とて呵々と打笑に、其抱負の大なるを奧ゆかしと思ひて、時世の弊、外患の論などかたるうちにいつしか雨はれて、夕日かたむきしをしらざりき、それより七日斗おなじ宿りに起臥たりしが、吉田氏は、肩だすきにかけて持れし大きなる袋の上下縮ゆひたる中より、地圖又は細かに書し物取出て何事をか書寫さるゝなど夜毎に更る迄おこたられざりき、遂に江戸に到着せし時、雞聲窪の僕店(今の一ぜんめしや)に

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

入りて午飯に別れを告げ、吉田氏は番町の劍客、齋藤彌九郎方へさし、予は下谷の我家へと袂をわかちぬ、この後志ばく吉田氏、我もとを訪はるゝを、母かいまみ給いて、彼は有爲の士とは見ゆれど、をしむべし、また時世彼を容ぬをいかにせん、さる人に年少く血氣にはやる者の交じらはゞ、いかなる奇怪なる事をし出んとすらん、かまへてまじらふべき人物ならず、さけ賜へとさとし賜ひし後、はたして吉田氏捕はれて關係ある人の難義に及びしもありき、こも母の人を見賜ふ眼の高きがゆゑなり、又或富貴なる人の家にて予を養子に乞うけたしと、日頃しれる徒士目付をもてしばくいひ入れしを、母幾度も斷り賜いつれど、などいなみ給ふことの候べき、二男の君なればいづれへか、必道はし賜ふべきなめるを、吾も二男にて今の家へきたりつるが故に、この御役をもつとめ得るやうに成たりといへりしが氣にさかひ賜ひけん、つと膝をすゝめ賜ひて、實にくおん身如き、實家の貧しきをかへりみず、今の榮花をたのみ、養家の資格にほこり賜ふらんやうの人とそ養子にも行べけれ、我子においては、身一ッに、もてあつかひ、一家をなし能はぬ如きものには候はず、實なる父兄の扶助たもうくべきものには候はねば重ねてさる御すゝめ御無用なりと、言放ち賜ひしを美談と人もかたりあひぬ、祖母君は常ものやさしく、大かたの事には人にさからひ賜ふ事なく、下をめぐみ賜ふ事深くて、寒中火の番の邸の内、見めぐるを、あはれのものに思ひ賜ひて、あつき粥、手づから與賜ひて、廻りきたるを待うけ、窓よりさし出して、これもてあたゝまれ、とて賜はりぬ、これの一事を思ひても、祖母君の人となりをしれ、女は柔かなるうちに剛き所あるがよきなり、雪に折れぬ竹などゝは祖母君の事なるべし、よく思ひふくみて心得ともせよかし、又折あらばわが若かりしほどの事などもかたらんと坐を立ち賜いぬ。

年末及年頭の贈

鈴木弘恭大人述
百人一首講義　上製五十錢（郵卅五錢）
　　　　　　　並製卅五錢（郵廿八錢）

クリスマスの贈品
猫と鼠　一冊七錢宛（郵五錢也）

小説

流の葦　是空子

第六回（源）（下）

稍やありて客人の歸り行く音きこえ、淸女が奥の樣態を申す聲微かにして、扨は間ひの伏間穩やかに開き、先生は出で來り玉ふ。

俄然室内の空氣を入替たらんが如く、亦大ランプの光を一層搔き立たらんが如し。安女は肅然として立禮す。

文人は人より發する一種の氣を何如にとも書き盡すことを得べし。畫工は之を形にして色に見はすの外なし。ラフハエロ、基督及び聖徒の像を畫きて其周邊に光輝々の彩線を添えたるは、實に然あるべきことなり。すぐれ人は、つねに一種の光線を發つ、之に照さるゝ者、自づから崇敬の念ひを起す。

人と相ひ接し、卒然直ちに言語を發するものは、心輕きか、又は神經の過敏なる質なり、先づ開口の自由を讓りて、他をして緩やかに辭を發するの暇まを得せしむべし。之を人に對するの禮となし、又た自己を養ふの工夫とす。

大方の人は、相見る三四秒にして既に優劣の差等を感ずるものなり。暴りに叩き合ひ盲ら聲に劒を交ゆるは、武藝の心得淺々しき人なり。最后の勝負は兩々相對し矢聲と共に突立ちたる瞬間に決す。むかし、正雪、蕃山と相睨むこと數刻、未だ一語を交へずして別れ、互ひに驚歎したり。喃々の辭を悉して初めて人を知ると云ふは、暗者の事とす。

人を視ること皆同輩の如けれど、同輩は皆な推薦して之を先生と云へり。先生は、出で來りて靜かに禮し、そと椅子に椅りて暫らく辭ばなし。左れど、批評的の眼ことを以て人を睨むにはあらず、先生は最早人を批評して自からに警戒するの必要を有せず、左りとて卒々辭を發して客の意を迎ふべき所用はあらず。温顔に限りなき愛を示し、たゞ沈着として來人の來意を聞んとせり。

安女は重き荷を負ひて來りたれど、此に入ると共に其半ば過ぎを卸し、先生を見て其重厚なる風采に接してより、道念の勇氣勃々興りて、區々思ひ煩らひしことを恥かしきやうに思ひ、急かには口を開かず。

又た彼女は、嚴肅にして雄々しき心の裏に、素より常ならぬ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

乙女氣を存せり。乙女氣とは大丈夫の廉恥の心に似たり。寸毫の節義を曲げんよりは万斤の重を擔ふて壓死せらるゝを尚輕しとするは大丈夫の事なり。麗はしき動作をたゞならぬたしなみとして、眞美の態を汚すを恥るは、乙女子の用心なり。すと赤らみて顔に紅葉を散らし、温かき胸に動氣を躍らせて稍や口ごもるなど、乙女にとりては決して勇なきと又は飾るとにはあらず。之をこれ乙女氣とは云ふ。乙女氣は女性特有の一種の廉恥心なり。

いとも敬愛する人に接し、恥かしきにあらぬ恥かしさを感じ、恐ろしきにあらぬ恐ろしさを覺へて、暫し控て言を發するにためらふは、年若くして心得ある婦女子に多き例しなり。安女は忽かに應對せず。

清女がカヒーを携さへ、菓子を更めて來り、其まゝ傍らに侍べりてより、先生は稍や打くつろげる樣なり。安女は稍やく口を開き、辭ば少なに令夫人の病氣をくやみ、先生の恙がなきを祝し、且つ仕ふる人の言傳を申し述べける。

何如です、おつる樣は、相變らず御勉强ですか。

いと穩やかに問ひかけたる先生に對ひ、最早聴したる氣色もなく、

餘り御勉强をお過ぎ遊ばすかと存し升ほどで、夫に近頃色々御苦勞を遊ばすとが御座り升て、それに付、是非手前が御相談を戴だきたくて今晩參りました。

左樣ですか、どふ云ふ御容姿です。

靈魂の教師は、肉體の醫伯に同じ、先づ其容態を知らずんばある可らず。容態を聞かずして直ちに人の苦勞に驚ろくも亦淺々し。苦勞は決して人の害にあらざれば也。幸福なる悲しみあり、祝すべき煩悶あり、涙は必らずしも災の徴候にはあらず。

御婚姻の事で御座います。

猶豫なく言ひ出し、且つ傍らに掛念顔せる清女の方を一寸と打見たり。同情を請はんとてなり。清女は一入思ひ込みたる樣にて口をつぐみたるまゝ、ちと點頭づき「さるとに候か」と言はぬ斗りの面色せり。

夫が、ナゼ苦勞なのです？。

實に怪しむべきとなり、婚姻は祝すべきとなればなり。先生の奇しみ玉ふ問に、一層心迫り、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

御承知で居らつしやいますか、お邸に、滑川と申します執事が居りますので、其方のおすゝめとかにて、最初濱の商人で川上魁と云ふお人と御縁談がありましたので御座います。…………

ナル程。

で御座いましたが、其川上と云ふ方は、隨分聽かぬ氣のお方で、最初から華族などの娘は面白くない、貧乏人の子ならば貰つても善いなどと仰しやつた相で、何も御當人から御好みでは無つたので御座います、夫を滑川がどう取持升たものか、先づ大方にきまりまして、何日には結納の取かはせと云ふ迄になりました時、俄かに話しが變はりましたので御座います。

ハ、ー、？

どうも滑川が申すとが分りませんし、夫に熊と申します老女などが切りに悪るく言ひましたので、結納が暫らく延引するうち、矢張り濱の商人で大江卓造と云ふ方へ俄かに緣談が變りまして、夫は大相急にきまりましたので御座います。もと〳〵川上さんの方はさしてお好みと云ふほどで無つたのですから、破談と成りては大して苦情を仰しやらなかつたのが、大江さんの方へ行くのとお聞になつてから、恐ろしくお怒りになり、昨日あたりは余程手ひどい談判にお出のやうでありました。

以上の談話は、傍に聞居たる淸女の爲には、早くも涙の種なりける。膝を進ませ、息氣を殺ろして、先生のお考は何如やあると案じ煩らふ樣なり。されど、先生は、倘ほ此丈けの談話にては、ちとの要領をも得ざるが如く、いと不審顏に、

デ、お鶴さんは、一躰どういふお心なのですか、

忽然氣注きたる如く、安女は話頭を轉じ、

お孃さまは、何れにもお進み遊ばさないのです、一躰御當人へは初めから御相談はないので、何れもあとからお聞になりましたので御座り升。

不都合極まるッ！。

激し玉へる躰初めて少しく見ゆ。安女は倘ほつゞきて、

然し平常愼しみの深い方故お心の程は察し兼升が大江卓造と云ふ方のとは少しはお聞及になつて居ます樣で、其方には斷然（力を凝め勇を現はして云ふ）行ぬ！、と仰しやつて居らつしやいます。

左樣でせうとも。それで善です。

善悪は、未だ聞かぬ間に、既に斷乎たる判定を敎えられ、はや問ふべきとも無くなりてけり。漸やく復た思ひ出し、

で、御座いますが、川上からの談判が餘り嚴しう御座い升ので、殿樣も餘程御難儀の樣で御座い升、夫れ故お孃さまは大相御苦勞遊ばして、いつそ何れにか早く定まればあど仰しやますの、つい、そのまゝに御承知にならうとする樣な擬梅も伺ひましたから、私しどもからも、思ひます丈けは申上ました。　お孃さまは、殿樣が御苦勞遊ばすのを見ては居られんと仰しやいますので御座います。

夫は善いとです、ダガ、一躰、その川上は、何如云ふ風に談判するのです。

約束どふり、いつ結納を取交はせやうと申す丈けで御座います相ですが、餘程利かぬ氣のお方だそうでして、譯もなく斷はり切れず、又た、一たん言ひ出したらば、隨分亂暴を爲さつても決して后には引かぬと云ふ氣象ださうで御座います。

夫では、大江の方を先づ斷はつて、夫から、川上が何んと云ふても、當人が不承知ならば破談にする迄のとで、何も六かしいとは有ますまい。又た、御主人が惡るければおあやまりなさるが宜しい。滑川が惡いのならば、暇をお出しなさるが宜しい。夫等のとで、おつるさんが節を曲げる譯もなく、又曲げて孝行にもなりますまい。夫で大江が承知せぬと云ふても、夫迄です。又た、川上が前約を履行しやうと云ふても、實は約束は未だ成立つて居ないのです。双方ともに止めると云ふが至當でせう。

快刀亂麻を切り、万糸の本線直ちに分明となりぬ。何故ゑ、かゝる明白至極の事に疑惑せしか、吾ながらいぶかし。凡そ道徳上斷行の勇なきときは、道に迷ひて疑惑の雲いよ／＼暗きものあり。されど今や朝日快ちよく登りぬ。安女がやゝ悟りたる樣を見て、倚ほつゞき、

夫に、川上が談判と云ふのは、外に仔細がありませう、川上と云ふのは、私しも知つて居ますが、中々善い質です、一つは大江卓造に引けを取らぬと云ふやうな尋常の所からでもありませうが、夫斗りではありますまい、すこし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

外に意味がなくてはと思いますナ。
左様で御座いませうか？。
いと不思議氣に問ひ掛つゝ、
どう云ふとで御座います？。
イヤ、推察ですが、大方左様かと思ふのです、遠からず分りませう、兎に角、其事は直に片付ませう、お鶴さんが御心配なさらぬやう、叉決して道を譲らぬやう(！)ようく傳へて下さい。
先生！。
少しく聲をふるわせて、
夫にも一つの事が御座います、御承知の山中疑堂さんと申升、お邸の若様のお出なさる學校の教師では御座いますが、若様から色々お聞になつたり、叉、其のお書なさつたものをお讀になりまして、お孃さまは餘程服してお出でなさるやうで御座いましたが、先達て、其お方の所ろへお孃さまよりお便りがありましたそうで、……其お手紙がどう云ふもので御座いますか、滑川や熊などの手に入りまして、どう／＼殿様が御覧になりましたのです。
清女は、顔をしかめ、左も疑へる様なり。
先生は、尚しづかに、
左様ですか。夫はどう云ふ手紙です？。

批評

○大阪文藝

難波津の文學を古しに反さばやとて、今の大阪の文藝會なるもの起り、雜誌を發行す。東の都とは自づからにして事變りたる趣きあり亦讀むべきものとす。初號、二號に、木内伊之助氏が僧天海と徳川氏の初世と云へる文あり。

○看病婦美談

英國人ルーステール夫人の原著を久野正香氏譯し、警醒社より取次發賣するもの、本號家政欄内にて評せしを見よ。

○宇宙

元の我樂多文庫編者喜多川金吾氏が編輯にて、「宇宙」と云ふもの、第一號出づ。巻の終始に、ゲルンルト、ダビデなどの詩を掲げたるは、一新躰なり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

笑ひ草

婦人　ふみ子さんの樣に兄さんが有つたら、嘸好でせうネ、なんでせう、何の事が有れば、キット肩を持つて下さるでせう？

ふみ子　エーさうですとも、一處に歩行て、溝でも跨ぐ時はいつでも私の肩を持ちますワ。

○さる後家ばゝ、病猁に身躰の衰弱するまゝ、氣も挫けはてゝ、懺悔の胸を老婢にまで開き、どふもわたしも六十近くなるまで罪つくりをしてゐて、サッパり自分では氣がつかなかつたもんだからネ、

老婢　オヤ、さ樣ですか？私なんかは遠から氣がついて居ましたよ。

○避暑とて田舍へ參りしやれもの、令孃、マア、あの牛のわたしを恐ろしひ眼をして見てると、どうした譯でせうネ？

百姓　おめへさまの赤い日傘でがんせう、

令孃　オヤさう、呆れつちまつた、このえび色の傘は東京あんかじや少し流行外れだと思つて肩身がせまかつたけれど、まさか田舍の牛まで氣がつかふとは思はなかつたに。

○傳話器にむかつて應答する時分に、實際向ふの人と顔を合てせゐるのでないと思へぬとも有り升。此夏の炎暑にある銀行の机に向つた紳士が幾分か苦惱を避けやうとしてシャツ一ツで調物をしてる眞最中、小僧か頭を出して一寸、鈴木さん、傳話器までおいでなさつて下さい。令樣がお呼出しですから。

紳士　エーなに令樣だと！、それは大變だ！、といひさまあわてゝカラよ、領飾りよ、コートよと身仕度をとゝのへ、頭髮にも一櫛あて、大汗になつて傳話の口へ走り寄り升た。

人の排と妻の如何は其運命の四分の三を形造る。

戸內の燈心は時としては皇天の星に勝る。

婦人の感化力は慈善の業と比しく戸內に始る可れど又決して戸內に止まる可きものに非ず。

時事

○兩伯會合

板垣伯、公然、大隈伯の招に應じて、早稻田に遊ぶ、何んぞ夫れ壯んなる。一國囑望の政事家たるもの、當に如此く磊々落々たるべし。

○憲法第六十七條

「日本」紙上に谷干城子の解釋あり、毎日新聞紙上、島田三郎氏の釋解あり、共に大ひに觀るべきものなり。然れども憲法の解釋は字句言論の間に存せず。吾人は本年の議會が能く實力を以て其解釋を仕遂ふせんことを祈る。憲法は生くべきものなり、之を動かすにも亦生命を要す。蓋し紙上文人の空々談論すべきものにはあらざる也。

○海軍熱

本年の議會には、海軍擴張の議出づべし。而して議員中の多數は大率ね之に向つて好意を表するもの丶如し。然れども吾人は本年の議會が果して如此き長計を決するに堪ゆるものたるか否やを疑ふ。たとひ又之を能くすと云ふと雖ども、抑そも海軍を如何に擴張せんとする乎。軍艦を増し、士官を養成するときは、則はち海軍を擴張すべしと云ふ乎。如此き見解は、官吏の爲すこと也、民間士人の夢にだも懷抱すべきものにあらざる也。諸君は何故に寧しろ漁村の制度、水産の營業、商船學校の擴張等に注目せざる乎。

○高等中學校

高等中學校全廢論多數に居るが如し、而して到底一個を存して他を滅するに於て折合を定むべき歟。吾人の如きは、今の大學にすら其必要を感ぜざるもの也、高等中學の如きは、全廢せば尤も好し、之を減ずるに至るも亦可也と信ず。

○二の大學

官立大學を競爭せしめんが爲に、二個の大學を置くべし、而して其一は西京もしくは大阪に置くべしとの意見格外に勢力あり。之も亦笑ふべき策也。第二の大學出來し上、果して能く主府に於ける大學と競爭し得べしと思ふ乎。暗も亦極まる哉。何んぞ今の各地の高等中學校に鑑みて、早く其愚を悟らざる。二個の大學出來なば、新たなる大學は、倒れたる高等中學校敎師の住み家となるのみ、他に影響なし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●廢娼記事

○全國廢娼同盟會

其年會の爲め大演說會を、七八の兩夜本郷中央會堂に於て催ふし、初夜は、服部綾雄君「公娼全廢を望む一二の理由」と題し、數年間米國桑港にありて青年會員を率ひ我國出稼醜業女の取締に從事したる、經驗あり、たとひ密賣淫蔓延するも尚ほ公娼を全廢する方遙かに優れりと云ふの說を述られ。イービ君は「如何にして勝利を得べき乎」と題し、亞片の用方を制し狂人の取扱方を溫和にするなどのことすら最初は頑固なる醫師の反對を受たり、然るに遂に今日の如くなれりと云ひて吾等が運動は寸時も止めず益々敵を說伏するにありと述られ。植村正久君は「社會の良心」と題して、凡そ良からぬ人民は衰へ、神を信ぜざる國は亡ぶと慨して、日本社會の良心の鈍きことを責め、近著「ひつじかひ」をハウソルンが紅字標に比較して目今の時弊を痛論し、廢娼論の如きは即はち之を救ふの一方なりと述られ。押川方義君は、「廢娼論に付ての感」と題し、日本人民の理想低くきことを慨歎し、日本第一流の學者と、ロンドン第一流の學者との言へりしことを比較して天地の懸隔を明示し、中等以上の士人、國家の柱石たるべき學者、民の租稅に食ふ所ろの官人が、姦淫に耽り、邪道に落るの時弊を酷責し、何人か廢娼論の如きものに贊成せざるものあると痛論せられ。島田三郎氏は、「海外出稼醜業者と內地醜業者との關係」と題して、凡そ弊害は之に慣るゝによりてその弊害あることを忘る、同樣の事新に起る時は則はち初めて其相を看破すと云ひて、海外出稼醜業者に對する輿論と、千葉縣下に近年初めて公娼を置たる時、佐倉兵營の士官が反つて之に反對したるの事實とを舉て、公娼の弊害を反證せられたり。聽衆堂に滿ち、終始謹聽したり。

八日の夜は政談演說會なれば、學生の爲に掛念し聽衆定めて少なかるべしと思ひしに、定刻前既に聽衆堂に滿ちたれば、門をメ切り後入者を謝絕したれば、門外にて遺憾と叫びて歸去せるもの數を知らず。扨て、定刻に至り、石島良三郎氏は開會の辭を述べ、次に、青木秀三郎君「廢娼論、當路者を責む」と題して、品川大臣に望む所ろあり。次に、佐々木笑受郎君「大なる哉公娼の害」と題して、其の國體、經濟、風俗などの上に大害あることを述られ。次に、根本正君「自由敎育」と題して、六百五十万圓を小學校の資本金に使用し、無謝儀敎育を盛んにして敎育を普及し以て廢娼の根底を築くの說を述られ。次に、江原素六君は「大に廢娼會を興すべし」と題して、昔し水野越前守が公娼を廢せし當時の結果を述べて、廢娼後決して密賣淫の增加せざることを證し、各地に廢娼會を隆んにすべしと述られ。平岩愃保君は「醜業奴隷を解放すべし」と題し、娼妓と妓樓とは、明らかに日本憲法に反くことを明證し、之を制限しつゝ之を公許するの理由なきことを痛論せられぬ。此夜聽衆中切りに妨害を試むるものあり、中には壯士、及び遊廓の妓夫らしきもの數名見へしかば、最初開會の節斷はり置きしに隨ひ、特更に重々たるもの數名に退場を命ぜしかば、其後は極めて靜肅なりき。

○橫濱

橫濱青年會員は、縣會開會中を機とし、去十三日の夜、東京の服部綾雄氏、上毛の石崎良三郎氏を聘し、廢娼大演說會を催ふしたり。

○尾濃の大怪事

何等惡むべき醜業者ぞ、此度の震災を機とし、不幸の少女を三文錢にて買入れ、不義の利を貪らんとて續々妓樓主人立入り奔走中の躰見へたるより、目下名古屋に滯在中の飯野吉三郎氏初め、愛知岐阜兩縣下の廢娼會員大に會合して其防禦策を講ぜらるると云ふ。

○行軍中の廢娼調査

近衞隊一年志願兵たる齋藤善作、同宇一郎の兩氏は、過月の行軍中、平塚町、藤澤町、保土ヶ谷町、川崎町四ヶ所の娼況を極めて綿密に調査し、且つ廢娼論起りてより、頓に遊客の減じたる明證數條を徵し、又厚木町々長に說いて廢娼論に加擔せしめ、妓樓設置は反つて密賣淫を增加するの理を細密なる統計表によりて明示されぬ。其表は、近日發行せんとする廢娼雜誌中に掲載すべし。

○北越

北越廢娼同盟會は、廢娼論文を巨多印刷し四方に配布せんが爲に盡力中なり。

○長野

長野縣會に於ては、本年こそとて其地方の廢娼會員大に盡力中、こゝに、布施、津久井、木下の三氏は知事淺田德則氏を訪ひ、廢娼贊成の答を得たり。

○仙台

押川君歸仙の後ち、仙台に廢娼大演說會を催ふし、府下よりも一名遊說せんとす。

●年會

來廿三日午前九時より明治女學校に年會報告會を開き、正午懇親會を開き、夜再び大演說會を催ふさん。

●建議

廢娼壯年義會は公娼全廢の建議に、東京廢娼會は醜業者政權剝奪請願に從事することに定めたり。

●廢娼雜誌

彌よ十二月五日を以て其第一號を出版せんとす。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女報

もと子編

●皇后陛下の御仁德　陛下の御仁慈に渡らせ玉ふは今に始めぬとにて申すも畏し陛下には去る日芝慈惠院に行啓あらせられ高木委員長の御案内にて各病室を巡らせたまひしが病者には懇ろにその病狀を尋ねさせられ小兒には菓子玩弄品など下し賜はりしばし御休息伊藤海軍大尉の病狀に御親問あらせられそれより芝の離宮に成らせられ有栖川の宮を始め高木醫員長長崎秘書官等に日本料理の御陪食仰付られ親しく御盃を陪食の人々に下し給ひ四方八面の御話ともありし末長崎秘書官を近く召させられ今般愛知岐阜兩縣の災害は實に非常のことにて昨日松方總理の詳報を聞き其慘狀の益々甚しきを覺ゆるは痛ましき限りなりとの御沙汰なりけるにぞ長崎秘書官は不幸なる災害地の人民に於ても兩陛下の厚き御惠みにて不幸の内にも喜びの眉を開らき有難き大御心に負傷の痛みも忘れ居るよしに承はる旨奏しけるに　陛下には何とも御沙汰はなくて只た愁はしき躰に見えさせたまひし趣なりいつもながら御仁德のほど有り難きまで畏し。

●行啓　皇后陛下は去る十二日午前九時三十分御出門鹿鳴館に於て開かれたる婦人慈善會へ　行啓あらせられたり。

●帝室の御儉德　帝室御内輪の御質素なる御事は、折々洩れ承り常に感佩し居ることなるが、此程或人が麻布の御殿に御在します皇女富美宮殿下に伺候し親しく見奉りしとて感歎しての物語りに、殿下には緋木綿の御襁褓を着させられ御敷布團、御介卷等は何れもメリンスなりといふ。我等臣民もれ聞て感涙に不堪、殊に一家の主婦たるもの謹みて自らを省られよ。

●高島子爵夫人の慈善　高島陸軍大臣の夫人は手づから家族の人々と共にフランネルの衣服三ダースを新裁し之に綿撒絲五十反を添へて岐阜愛知の兩震災地に於ける負傷者へ宛て昨朝發送せりと。

●岩倉公爵夫人の義捐　公爵夫人岩倉久子より此度震災に罹りし岐阜縣へ五十圓、愛知縣へ五十圓、都合百圓義捐金として送附されたり。

●輿入　故三條公爵の令孃知惠子は閑院宮殿下と結婚の約整ひたるに付明十五日を以て輿入相成る由。

●婦人慈善會　鹿鳴館に於て開設せられたり、慈善會の收入は、東京慈惠醫院の施療費に供するの豫定なりしも、　皇后陛下の御仁慈を奉體し今回の收入は悉皆震災地方の救助に充てらるゝ由なり。

●英國婦人の奇特　麻布永坂町香蘭女學校雇英國看護婦グレース、ハートレー女は、今回岐阜愛知兩縣下震災に付其の筋の許可を得て、去三日被害者看護の爲め京橋區入舟町醫師小島氏を伴ひ被害地方へ急行せしが、實際慘狀を目擊して看護婦の不足を感じ、同校教授なる英婦人イー、メーントン女へ電報を以て來援を乞ひたれば、同女も快く承諾し早速該地へ赴かれたりと。

●婦人慈善音樂會　貧民職業女學校創立費補充の爲め大日本婦人教育會會長毛利公爵夫人の發起にて去七日午後一時より虎の門内舊工部大學校講堂に於て慈善音樂會を催ほせしに幾多の貴女紳士來會し滿場立錐の地なきに至り定めの時刻より種々の音樂踏舞ありて午後五時頃退散せし由。

●震災悼追慈善會　震災被害を救助するの目的を以て島田政子、松本榮子、小方富貴子三女史の發企に係る同會は去る十二日午後五時より山下帝國ホテルに開き本多庸一氏の被害地實況、明治女學校生徒の唱歌、山勢松韶氏外數名の三曲、菊地大麓氏の演說、テング夫人のピアノ獨吟、三遊亭圓朝の演說及び被害地實況の幻燈等を催ほしたりといふ。

●震災義捐　横濱相生町六角今井兩氏の夫人は去八日綳帶百卷曝木綿三十反藥品十瓶を罹災者救助の目的を以て東京慈惠病院へ寄贈せしにより即時愛知縣中島郡祖父江村へ出張の同醫員方へ遞送せしといふ。

●海岸女學校の慈善　京橋區築地明石町の海岸女學校にては尾張に於ける震災被害者救護のため衣類數十點を惠與せんとて日下生徒一同は休業の上夜を徹して右のお縫に從事し居れりと。

●看護婦の義捐　負傷者救治の爲め赤十字社病院看護婦二十名は過日岐阜愛知の兩縣下へ出張せしが殘りの看護婦及び同生徒等は現場に臨み看護に從事せざるを遺憾とし一同より罹災者救助の爲め金十圓を義捐し寄送したり。

●下谷の會　基督教青年會婦人親和會に於ては震災救恤の爲め去十一日午後六時より本鄉區春木町二丁目の中央會堂に於て慈善音樂會を執行し三曲薩摩琵琶、落語、手品、義太夫、清樂、洋樂並に島田三郎氏の演說等ありたり。

●福澤家手裁の絆天　昨今次第に寒氣を增すの時節、震災地方の難澁は一入ならんとて福澤先生の家内にては二子木綿の絆天を百枚ばかり贈ることに決し、其仕立を他人の手に任せては不本意なりとて令孃を始め若婦人老婦人打寄りて裁縫の勞をとらる。

●發賣禁止　人物景色の混畫中裸躰西洋婦人化粧の圖二個を揭げたる彫畵一枚は風俗を壞亂するの恐れあるを以て發賣頒布を禁止せられたり。

●外國婦人我が挿花法を學ぶ　目下帝國ホテルに滯在せる米國貴婦人某は、去る三日天長節の夜會に臨み菊にて床柱等を飾れる巧妙なる大花瓶の生花の如何にも韻致に富みて得も云れぬ趣あるに感じ、兼而懇親なる金子書記官夫人に請ふて挿花を稽古することに取極めたりと。

●土佐婦人會　在京土佐出身の婦人は　明十五日午後富士見町なる富士見倶樂部に於て同會を開くと云ふ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

●共立女子職業學校　神田一橋通町なる同校に於ては去る七日午前九時より午後三時まで、生徒製品を陳列し且つ裁縫、圖畫、刺繍、編物、造花等授業の模樣を衆庶に觀覽せしめたり。

●廢娼會委員會　各地廢娼團隊の委員諸氏には來る二十三日午前九時より明治女學校の講堂に相會して大に運動の方針を攻究するよし。

●女子高等師範學校教授南摩綱紀氏は　年俸金四百圓を賜はせらる。

●越後高田通信　高田みち孃の來遊、婦人社會にて佛教篤信の聞へある東京貴婦人會幹事高田みち孃は、本郡國府村小丸山其他舊蹟參拜方々過般來遊せられたり、而して當地高陽女學校へ聘せられ生徒のために因果の佛說及女子教育に就て談話せられたり、亦米南婦人修道會へも臨席して一場の談話をなしたり。

●英米に於ける婦人の職業　英國幷に北米合衆國に於ける婦人の職業に關しては種々の誤評あり。合衆國は其名の如く數多の州都の合衆したる國なるを以て隨、各州婦人執務の有樣を異にする事を記せざる可らず。例せば賃金、セントポールは婦人職工の乏しきが爲高價なり、バフアローは婦女多きが爲廉なり、リチモンドの婦女は氣候地勢の關係より健康ならず隨て執務に適せず、ブルークリンは紐育程人工稠密ならぬを以て衣食廉なるも後者は職業の種類多きを以て大なる賃金を得、セントルイズにては職業多く、桑港は支那勞働者多きが爲白晳婦人の務を妨ぐ、費府の婦女は男子と同業を以て等しき賃金を得、チヤレストンにては婦女に手工の業を禁じあり。チカゴ府にては婦女職工欠乏を告ぐる計り需要多しとは云へ共、間に斷えざる不平は却て職業少なきより起る激しき競爭にも優ると云ふ。此くして合衆國にては紐育婦女職業クラブの一女工一週間所得太凡五十弗なるが英國の婦女は一年にして猶甚雖しと云ふ。此を以ても英米婦女賃金の大差爭ふ可らざるの事實なり。合衆國中マッチ製造場の工女賃金平均一年四十八磅なり。今英女工一週間七志に比して其差驚くべきなり。洗濯女米に於て一年六十二磅の所得なるも英に於ては四十磅に過ぎず一週二十乃至二十二志なり。服裝店は格外の業にして倫敦は一週間壹磅米國にては一磅五十志計なり。一週五十志位はシカゴ書籍店の賣手たらんには容易き所得なり、されど各州を通じて一般に此かる賣手の賃金は一週凡そ一磅とす。此く比照し來れば桑港を以て第一とす即壹磅十志なるも衣食其他日用品の高價なる又他に比なし。セントポール平均賃金一磅五志、紐育一磅内外ボストンは猶少額、チカゴは一磅三志なり。此く賃金高額なるも日用の消費の大なるに於ては益なきなり。米國にては職工女が一年間衣食住費一人四十七磅なりと云ふ。大都府には大方は一週四志一ペンス乃至一磅の約定にて賄家ありシカゴにては十志の高額にて同じき婦人の賄家あり。數年前迄婦女の職業は僅々屈指する計なりしが昨今は合衆國のみにて四百以上の職業場は婦人を歡迎すると云ふ。

●パーチル氏、十月八日龍動發の報に曰くパーチル氏疾病の間は只夫人と一醫師の外誰も知るとなかりきと、氏は最終の日曜に醫師の語に頓着なく愛蘭土に行きカルウエーの大會に出席し寒冒の氣味にてブライトンに歸り次の金曜日急性リウマチスに侵され昨日夫人が腕によりて死に就けり。氏が凶報の愛蘭土に達するや人民の同情いとも哀れに見ゑにけり。又同夫人は愛蘭土黨が、氏を國葬にせんと云ゑるに一致し、遺骸は日曜日にダブリンに着し、葬式はグラスチゼンに執行され、遺體はダブリン府中央公堂に葬らんと望み居れり。醫師等は急性リウマチスに腦攣の加はりたるものなりと云居れり。

●文學者を女性に見立　宇宙第一號に文學者を女性に見立て云く、鷗外の女教師、正太夫の女壯士、不知菴の女髮結、南翠の娼妓、嵯峨の屋の女宣教師、美妙の櫓妻、春迺家の後室、篁村の待合の女將軍と。

●奇特の車夫　去る日弊社の受附に來りたる車夫あり、營業の忙きにや流るゝ額上の汗拭ひもあへず、腹掛の裡より垢じみたる財布をさり出し之を倒にして振り出す銅貨は十錢跡に一錢だも止めず、此の車夫は辭少なく是れ聊なれども美濃震災地の被害人民の賑恤の資に加へ給はゞ幸ひなりと、語の盡きぬ先きに車夫の足はハヤ外向きぬ、社員は之を呼び留めて名前を聞きたるも中村とのみ其の言葉もハヤ聞きされぬまでに走せ奔れり、實に奇特の車夫にこそ、末世射利の節道般の俠骨却て此等の徒にあり噫。是中正日報ノ記事なり讀みて覺えず落涙す、貧しきやもめの二つのレプタと比すべき至誠に動かされてなり次に天下の勇に乏きものゝ之を聞いて起るものあらんことを思ふ、今日の社會猶此中村を出す記て喜びの涙せきあへず。

●物品義捐の取扱　眞理(宗教雜誌)記者丸山清水等の諸氏は震災地方への物品義捐者の爲め取次の勞を執るよしなれば義捐者は成べく早くはがきを以て小石川區上富坂町廿四番地丸山通一、同區表町百九番地清水戴四郎兩氏の中へ通知するか將た市中配達便にて物品を送付せらるべしとなり、授けて物品を義捐せんとする婦妹に告ぐ。

●婦人矯風會　は醫師三澤默二氏と看病婦廣瀨梅、大塚文野の二女史とを震災地に送り、主も岐阜に於て慈善看病に從事せしむ。

●孤兒　尤とも憫れむべきは孤兒なるべし、東京築地の救育院は目下彼地にある星野愼之輔氏に托し、差當り孤兒十數名連歸られたきとを委賴したり。又た播州龍野の孤育院主富井定助氏は我社に委賴せられたるにより、我社は目下彼地にある砥貝製峯、坂野吉三郎氏に托し三十餘名を播州に送らんとす。

●我社員の報告　目下社員にして震災地にあるもの三名、皆な其景況を報告することを第二にして、夫々慰藉救助の事に盡力せり、左れど續々長文の報告を送り越したるあれど、多くは皆な新聞紙に掲げたるに同じければ略す。又た星野氏は、尤とも慘憺を極めたる景況の大寫眞十數葉を取り近日歸京せらるべきに付、之を幻燈にして公衆に示さんと欲す。

●或老翁　震災地にて或老翁倒れ　とする我家に入りて千圓の金を取り出し將に逃れ出んとする時倒るゝ家に半ば身を敷れ叫んで一百圓を寄附するにより助けくれよと云へり。

●宗教上　震災地には傳道を大切とす、又其の地の景況にして吾黨が尤も探知すべきは道德に關係するの事項なりと約し星野河合の二氏は主も其邊に注目せられたり、續々の通信中其言甚多くして云へり、人心今や宗教に傾むき、無常の中に或る變りなきものを求るの念甚はだ切なるがごとしと。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

品名	十一月十二日
白米（一円ニ付）一等米	（斗升合）一〇二
二等米	一〇三
三等米	一〇五
四等米	一〇七
五等米	一一一
正米（一円ニ付）美濃米	（斗升合）一三七
尾張米	一三五
庄内米	一四一
忍領米	一三七
一志米	一三五
雜穀（一円ニ付）本貫大麥	（斗升合）三〇五
上州小麥	一九〇
竹林麥	一九五
梅澤大豆	二一三
青柳大豆	二〇〇
吟小豆	一七八
白胡麻	一三二
黒胡麻	一七五
鹽（一円ニ付）赤穗	（表）三〇〇
大鹽	三一〇
本齋	五〇〇
新齋	五四〇
醬油（一円ニ付）最上 極上 上物 中物 並物	（樽分厘）七五 八〇 八七 一、一二 一、三〇 一、六〇 一、七五 一、九〇 二、一〇 二、六〇
味噌（一円ニ付）地製上白	（貫）七、二〇〇
同上赤	七、二〇〇
同紅赤	四、五〇〇

品名	十一月十二日
木綿冬縞（一反ニ付）伊勢改良縞	（錢）七〇
同糸入縞	一、〇七
笠井糸入縞	一、〇〇
佐織茶縞	六〇
同糸入縞	六六
生機茶縞	三八
同糸入縞	五〇
美濃八丹	三二
同双子	七〇
瓦斯二子	一、二〇
同刕二重縞	一、七〇
物産縞	七八
糸入愛國縞	一、二〇
大和納戸織	四〇
別製結城地	八五
眞綿（一貫ニ付）上々入金	（円）一三三、〇〇
上入金	一一五、〇〇
並入金	一〇九、〇〇
松入金	一〇五、〇〇
竹入金	一〇〇、〇〇
梅入金	九二、〇〇
繰綿（一円ニ付）新本坂上銘大入	（目）八〇〇
新坂上銘大入	八一〇
新三別銘大入	八四〇
新三文庫入	九一〇
新尾文庫入	九三〇
絹糸（一円ニ付）本練花色	（匁）二六〇
同色物	二五〇
延糸色物	三二五
芥子糸	二八〇
色物太練	二五五
紡績糸	四五〇

品名	十一月十二日
製茶（一貫目ニ付）山城江州稀大頭	（円）二、五〇
同稀頭	二、一五
同大頭	一、八〇
同中頭	一、五三
同中茶	一、二一
狹山稀大頭	二、〇五
同稀頭	一、七五
同大頭	一、四〇
同中茶	一、三〇
同中茶	一、〇〇
鰹節（十貫目ニ付）土佐上	（円）二四、〇〇
薩摩大	二三、〇〇
伊豆上	二四、〇〇
城の腰小秋	二一、〇〇
房總上	二〇、〇〇
銚子上	一九、〇〇
水戸磐城	一八、〇〇
薪（一円ニ付）常州堅木	（束）五〇
同並	六五
曾根大東	二四
雜木同	二六
水油（一樽ニ付）地水	（円）六、六一
胡麻	九、八〇
荏油	九、七〇
桐油	五、九〇
綿油	七、五七
坂水	七、六五
石油（一箱ニ付）チヤスター	（円）一、五一
デボース	一、四九
ホーキ	一、五二
ロシヤ	一、五一

女學雜誌社取次書目

金森通倫君著　日本現在及將來之基督教	一冊	價	二十錢
池袋清風君著　淺瀬の波	二冊	同	三十錢
花房庸夫君著　明治女大學	一冊	同	二十錢
松田敏足君著　女小學躾草	二冊	同	四十錢
吉田利行君著　日本女子讀本	三冊	同	三十九錢
香月恕潔君著　女子文例	一冊	同	二十五錢
安東松次郎君著　貧兒の教育	一冊	同	六錢
湘煙女史著　善惡之岐	一冊	同	三十五錢
安枝武雄君編輯　正義の反響	一冊	同	十五錢
鈴木弘恭大人著　作文口授	一冊	同	二十八錢
三島通良君著　母のつとめ	二冊	同	七十錢
新倉鋌次郎君編　國文自在	一冊	同	四十錢
坪谷善四郎君著　日本女禮式	一冊	同	五十錢
木村駿吉君著　新編物理學	一冊	同	六十五錢
元良勇治郎君著　心理學	一冊	同	七十錢
鈴木弘恭大人著　國文抄	續出	同	三十錢
三上參次高津鍬三郎君著　日本文學史	二冊	同	一圓六十錢

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

東京救育院設立主意

世間憐ムベキモノ甚タ多シ。一衣ノ襤褸。辛クモ凍風ヲ凌クモノアリ。一個ノ破椀。纔カニ粥汁ヲ啜ルモノアリ。其貧。其窮。其惨ハ即チ惨ナリ然レモ。此種ノ貧民ニハ。性來風寛ナル躰軀ヲ抱キ。懶怠放逸。遂ニ自ラ其窮況ニ陷ルモノ多シ。況ンヤ。他ニ養フベキノ夫アリ。子アリ。親戚アリ。而尚大方ノ救助ヲ仰ントスルモノアルニ於テオヤ。吾人ハ此等貧民ヲ救ンヨリ、寧ロ他ニ救フベキ。急ノ最モ急ナルモノアルヲ知ル。天下無告ノ孤兒即チ是ナリ。頼ムベキノ父ハ死シ。慕フベキノ母ハ逝キ。自ラ衣ントシテ。衣ルコト能ハス。自ラ食マントシテ。食ムコト能ハス。果テハ授産場裏ノ犬トナリ。甚シキハ。一片ノ食。一椀ノ汁。尚得ルコト能ハズシテ往々路頭ニ倒ルヽモノアリ。嗚呼孤兒何ノ罪カアル。何ノ分別カアル。孤兒ニシテ若シ知ルアラシメハ。徒ラニ産レテ辛苦ヲ嘗メサリシモノヲ。豈ニ憐ムベキノ最モ切ナルモノニアラスヤ。誰カ言フ。吾ニ分ツベキノ衣ナシ。與フベキノ食ナシト。吾人若シ各一椀ノ食ヲ節セハ。能ク一孤兒ノ口ヲ糊スルニ足ルベシ。一穿ノ衣ヲ脫カハ、能ク一孤兒ノ躰ヲ煖ムルニ足ルベシ。飽食煖衣。分ツベキニ、分タス。割クベキニ。割カズハ。所謂無告ノ孤兒ヲ脅シテ。其ノ食ヲ奪フト亦何ンノ擇フ所カアル。想フテ此ニ到レハ。人誰カ不憫ノ情ヲ動サヽルモノアラン。慈善ノ擧ヲ賛ケザルモノアラン。況ンヤ。きりすとノ心。きりすとノ行。以テ其愛ヲ全フセント欲スルモノニ於テオヤ。

吾人等不肖。一ノ救育院ヲ設ケ。並ニ無告ノ孤兒若クハ貧兒ヲ救育センコトヲ企ツ。準備漸ク熟シ。試ニ三名ノ孤兒ヲ入院セシメタリ。吾人等資乏シク。力足ラス。所詮斯ル事業ニ堪ユヘクモアラス。偏ニ愛ナル神ノ祐助ト。博愛諸士ノ義俠ヲ頼ンデ。大膽ニモ。此事業ヲ創ムルコトヽナシヌ。兄弟ヨ。姉妹ヨ。諸君自家ノ經濟ニ謀リ。金錢ニマレ。物品ニマレ。可憐孤兒ノ爲メニ。應分ノ扶助ヲ垂レラレンコトヲ切望ノ至リニ堪エス。時將サニ凍天ニ近ク。朔風漸ク肌ヲ刺スノ比。食ヲ求メテ。食ヲ得ス。衣ヲ望ンテ。衣ヲ得ス。破壁頽床。僅カニ生ヲ聊ズル數百ノ孤兒ト貧兒ハ。諸君カ義俠心ノ開クヲ待テ。我救育院ニ來ントス。諸君願クハ割愛セヨ。孤兒ノ爲メニ。貧兒ノ爲メニ割愛セヨ

東京救育院　發起者　謹告

東京救育院概則

第一條　本院ハ主きりすとノ遺訓ニ遵ヒ天下無告ノ孤兒若クハ貧兒ヲ救育スルヲ以テ目的トス

第二條　本院ハ前條ノ目的ヲ達スル爲メニ內外慈善者ノ寄附ヲ仰キ之ヲ維持ス

第三條　本院ニ入ルヲ得ル孤兒ハ年齡六歲以上十一歲以下トス

第四條　本院事務ハ二名ノ委員ヲ置テ之ヲ掌ラシム

第五條　此概則ニ揭ゲザル事項ハ臨機役員ノ處置スルモノトス

第六條　本院ノ事務所ハ當分之內東京々橋區築地新榮町七丁目廿六番地立教女學校內ニ置ク

東京々橋區南飯田町一番地

東京救育院

寄送及通信ハ事務所內大須賀亮一小宮珠兩人ノ內ヘ御當被下度候

無代價貸間

基督敎ヲ奉ル婦人ニ限リ望ノ方ハ至急女學雜誌社ヘ御承合アリ

女學雜誌取次賣捌所

東京々橋區尾張町二丁目	東海堂
仝　神田	武藏屋
仝　京橋區彌左衞門町	巖々堂
仝　京橋	小西新聞舗
仝　京橋區木挽町一丁目	万字堂
仝　神田	朝陽堂
仝　芝櫻川町	萬春堂
神戸元町四丁目	福音舍
大阪東區備后町四丁目	岡島支店
京都佛光寺通烏丸東ヘ入町	東枝律書房
熊本市南新坪井町	草野書店
大阪土佐堀三丁目	福音社
盛岡市中橋通	東北堂
京都河原町二條下ル二丁目	大黒屋
宇都宮日野町	小林格
神戸下山手通三丁目	望榮堂

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

史海 第六卷 目次

○**聖武天皇**（續）……田口卯吉君

大佛落成の一擧海外までを震動し唐の玄宗をして喫驚せしめたりとの處新奈なるべし、而して是より奈良朝の衰運に向ひ孝謙の朝の紛亂の端を開く、

○**李斯**……蓮峰外史

西洋紀傳の躰を以て支那人を叙したるは此篇を以て嚆矢とす而して李斯豪傑たる所以初めて見るべし、

○**アレキサンドル大王**……擦嶋仁吉君

アレキサンドル大王の功業喋々を要せず、博士振らんと欲するものは斯る書に於て一讀し置くべし、

○**麻理亞哲列沙歌**……大江孝之君

相變らず自在なり、

○**僧玄昉考證**……久米邦武君

此篇を以て玄昉の汚名全く除去するを得たり人世の榮辱唯々識者の知るを待つのみ去るにても僧侶が從來之に注意せざりしは何ぞや、

毎月第四月曜日發兌○全國無遞送料○一冊金拾錢○一ヶ年分十二冊前金壹圓

東京市京橋區彌左衛門町七番地　**經濟雜誌社**

漢文學講義錄

毎月三回 三ノ日發

科目及講師

大學……三島中洲
詩經……山田濟齋
論語……本城鷹峯
春秋左氏傳……近藤南州
史記列傳……石川鴻齋
管子……藤澤南岳
孫子……内藤耻叟
莊子（第十七號ニテ完結）……大野雲譚
日本政記論文……生駒膽山
日本外史論文……池田蘆洲
十八史略……山田濟齋
唐宋八家文……五十川訒堂
文章軌範……土屋鳳洲
名家文解……久保檜谷
文話……岡三慶
詩話（第十九號ニテ完結）……石橋雲來

第一號六版　九月三日出來
第八號再版　九月廿七日出來

本號ニハ文學博士中村敬宇先生肖像石版刷一尺三寸餘ノ大附錄ヲ添ユ

第二十一號　十一月十三日出版

第一號ヨリ新刊マデ缺本無ク揃居候間速ニ御注文被下度候

本講義錄ハ毎號一万部ヲ印刷ス

本講義錄ハ朝鮮支那亞米利加等ヨリモ續々注文アリ

本社ハ基本金ヲ東京第百十九國立銀行（三菱銀行）ニ預置候ニ付決シテ途中廢刊等ノ恐ナシ他ノ無資力者ノ三號雜誌トハ同日ノ比ニアラズ

略則　●定價八錢●十部前金七十錢●二十部前金壹圓三十錢●三十部前金壹圓九十錢●遞送料一冊五厘●郵便爲換ハ麹町區飯田町支局宛●郵券代用一割増但二錢券●見本ヲ望マル、人ハ郵券八錢ヲ投セヨ

發行所　東京麹町區富士見町壹丁目卅四番地　**益友社**

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

政治雜誌 **北海時論** 毎月十日二十五日發兌

●北海時論は東洋問題終天の多事に際し感慨勃々として制する能はず將に來る**十一月十日**を期して舊躰面を大に**改良擴張**して政治雜誌と爲し斷然北辰星下に新頭角を現はし村上祐氏を主筆に推し其他鋭手敏腕の社員數名其任に當り剛直誠忠無遠慮無會釋獨立獨步驚乾坤動宇宙の快筆を振ひ滿腔の氣焔熱血を吐きて以て**拓地殖民の大經綸**を**講し**併て**實業上**に關する精確明晰なる記事を報導するを以て**特得の本領**とす●北海時論は直言直筆に替るに時々世界無類古今未曾有の面白可笑き**漫畫**を寫出し以て讀者の判斷を乞ふことあるへし

●北海時論は日本全國**無遞送料**にて定價前金●壹部金七錢●十二部金八十錢●二十四部金一圓五十錢●廣告料は廿四字詰一行一回金七錢●前金の外遞送せす●郵券代用二割增

增刊 來る十一月十日は**壹萬部**を刊行し上下兩院議員を始め全國全道の有士に配贈す故に廣告の**效大**なり依賴者は申込あれ

發行所 北海道札幌區北三條西七丁目一番地 **北海時論社**

看病法講習生募集

看病法講習生（給費若クハ自費）四拾名入學ヲ許ス望ノ者ハ來ル十九日限入學願書及履歷書差出受驗トシテ翌廿日午後一時出頭スベシ規則書ハ申出ニ依リ郵送ス

廿四年十一月 東京本鄉區元富士町 **醫科大學第一醫院**

產科往診廣告

晝夜ヲ論ゼス東京市內ノ姙婦產婦ヲ往診ス但報酬等ヲ要セズ

本鄉區元富士町 **醫科大學第一醫院**

廣告定價

持別廣告は婦女に關する協會會合等の記事を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

一行（廿七字詰）	一回	當金拾錢
同	三回以上	一割引
同	六回以上	二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絕す。營業上の事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし。

雜誌			
一冊	六錢	郵稅。五厘	（但府內無郵稅）
十二冊	五拾八錢	郵稅。五錢	（同前）

定價		
半年分	壹圓四拾六錢	府外は壹圓五拾六錢
一年分	貳圓六拾錢	府外は貳圓八拾六錢

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 **女學雜誌社**

編輯兼發行人 巖本善治

印刷人 堀口庄三

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

政治雜誌 **北海時論** 毎月十日二十五日發兌

●北海時論は東洋問題終天の多事に際し感慨勃々として制する能はす將に來る**十一月十日**を期して舊躰面を大に**改良擴張**して政治雜誌と爲し斬然北辰星下に新頭角を現はし村上祐氏を主筆に推し其他銳手敏腕の社員數名其任に當り剛直誠忠無遠慮無會釋獨立獨歩驚乾坤動宇宙の快筆を振ひ滿腔の氣焰熱血を吐きて以て**拓地殖民の大經綸**と講して併て**實業上**に關する精確明晰なる記事を報導するを以て**特得の本領**とす●北海時論は直言直筆に替るに時々世界無類古今未曾有の面白可笑き**漫畫**を寫出し以て讀者の判斷を乞ふことあるへし

●北海時論は日本全國**無遞送料**にて定價前金●壹部金七錢●十二部金八十錢二十四部金一圓五十錢●廣告料は廿四字詰一行一回金七錢●前金の外遞送せす●郵券代用二割増

增刊來る十一月十日は**壹萬部**を刊行し上下兩院議員を始め全國全道の有士に配贈す故に廣告の**效大**なり依頼者は申込あれ

發行所 北海道札幌區北三條西七丁目一番地 **北海時論社**

看病法講習生(給費若クハ自費)四拾名入學ヲ許ス望ノ者ハ來ル十九日限入學願書及履歷書差出受驗トシテ翌廿日午後一時出頭スベシ規則書ハ申出ニ依リ郵送ス

廿四年十一月

東京本鄉區元富士町
醫科大學第一醫院

產科往診廣告

晝夜ヲ論セス東京市內ノ姙婦產婦ヲ往診ス
但報酬等ヲ要セズ

本鄉區元富士町
醫科大學第一醫院

廣告定價

一行　一回　(廿七字詰)　前金拾錢
同　三回以上　一割引
同　六回以上　二割引

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絕す。慈善上の事物の廣告は社議の上無代價にて引受く。女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし。

持別廣告は婦女に關する協會會合等の記録を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

雜誌	定價			
一冊	六錢	郵稅。	五厘	(但府內無郵稅)
十一冊	五拾八錢	郵稅。	五錢	(同前)
半年分	壹圓四拾六錢	府外は		壹圓五拾六錢
一年分	貳圓六拾錢	府外は		貳圓八拾六錢

發行所　東京市麴町區下六番町六番地　**女學雜誌社**

編輯兼發行人　嚴本善治
印刷人　堀口庄三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY